

明日の県立図書館を思う

茅谷千恵子さん(子どもの本専門店こびすくらぶ代表・三重県立図書館協議会委員)

市町立図書館とのすみ分け

自分の専門である児童書の面ではすみ分けは難しい。定番のものは県立、市立を問わずあったほうがよいと思う。

例えば雑誌などの定期刊行物はすみ分けしたほうがよいと思うし、それを県が総括する必要があると思うので、この部分から無駄を考えていくべきではないか。

図書については取捨選択の判断が難しい。

協議会について

一年に一回の開催という中で、指定管理、個人情報流出、ビジネス支援などその時々の問題についての議論に終始し、県立図書館としての未来を積み重ねるという感じはなかった。

協議会のメンバーの選び方もよく見えず、そういう中で率直な発言をするのは難しい。真に心を割って話し合える空気は作りにくかった。

ワークショップなど、参加型にするともっと気軽に意見が言えるだろうし、もっとよい意見が出ると思う。

図書館にとって重要なこと

図書館にとって重要なことは、まずは専門性の底上げ。そして最終的には置く本と人の問題である。金太郎飴みたいな図書館ができて意味が無い。

市町立図書館の職員の中でも専門性の高い職員を知っているが、その数は極めて少ない。特に子どもの本への始まりをつなぐ部分では専門性を発揮してほしい。子どもがたくさんある本の中から、良質のものを選ぶ目を育てていくのを支援する資質が求められる。

最近の子どもは、展開の速いもの、会話形式のようなものは読めるが、自分で課題を解決していくようなものや、ゆっくり展開していくようなものが読めなくなっている。このような状況の中で「本物」を手渡していこうと思うとすごいエネルギーが要るし、声の掛け方とか配架の仕方の工夫、絵本・児童書への深い知識が必要だと感じる。このような部分でも県立が指導していくとよいのではないか。以前、県立図書館にいた司書は、子どもと本をつなぐ声掛けなどよくできていたし、前任の方の育てる姿勢等もあったのではないかと考えると、専門性を積み重ねていく仕組みが必要のように思われる。

自分で気付いて行動を変えられる(地域やニーズにあった図書館づくりの工夫ができる)人材を育てることが必要ではないか。そのような人材育成ためのリーダーシップを県立がとるとよい。